

ヴェブレンの衣服論

著者	内田 成
雑誌名	川口短大紀要
巻	21
ページ	1-22
発行年	2007-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000749/



ヴェブレンの衣服論

内 田 成

はじめに

ヴェブレン (Thorstein Veblen, 1857-1929) はアメリカの生んだ最も独創的な思想家としても、またコモンス (John R Commons, 1862-1945) やミッチェル (Wesley Clair Mitchell, 1874-1948) らとともに制度学者の建設者の一人としても知られている⁽¹⁾。その中でもヴェブレンは、当時の隣接諸科学の成果を積極的に摂取し、ラーナー (Max Lerner) も述べているように社会科学の「学問間の垣根を取り払った」と評価されている⁽²⁾。

ところで、ヴェブレンらの制度派経済学は 1920 年代にはアメリカの経済学界において卓越して地位を占め、アメリカ経済学の革新に貢献した。しかし、その後ケインズ主義の台頭により、その影響力は一時衰微したように見えた。その後 1970 年代に入り、南北問題や環境問題などが出現し、主流派経済学の限界が指摘され「経済学の危機」が叫ばれるようになるとともに、制度主義的な思考方法が再び脚光を浴び始めた⁽³⁾。

ヴェブレンは富裕階級が、その富を見せびらかすためにしばしば非常に衍示的な財やサービスを消費し、それによって一層大きな社会的な地位を獲得している、ということを述べている。ヴェブレンの著作は「名声」あるいは「地位」財に関する重要な研究体系を生んだ、といえる。それは制度化された消費形式であり、金銭的文化社会（資本主義者社会）における

消費の一形態である、と考えた⁽⁴⁾。すなわち、ヴェブレンにおいては制度として消費を分析しているところに特徴がある。

本稿で採り上げる「衣服」についてもヴェブレンは同様に制度という視点からアプローチしている。そこで、1894年に発表した「女性のドレスの経済理論」⁽⁵⁾ および 1899年に刊行された処女作『有閑階級の理論』の第7章「金銭的文化の表示としての衣服」⁽⁶⁾ を採り挙げ、衒示的消費に代表される独自の消費論に基づくヴェブレンの衣服論を中心に見てゆくことにした。それによりヴェブレンの衒示的消費論の具体的な側面が一層解明でき、併せて制度論としての消費論の一側面が解明できると考えたからに他ならない。

1. 「女性のドレスの経済理論」

ヴェブレンによれば「人間の衣服 (apparel) において、ドレスの要素は衣類 (clothing) の要素とは容易に区別される。分化は決して完全ではない。人間のアパレルの大部分は物的満足のためにも、ドレスのためにも着られる。さらにその多くのものは、外見上はその双方の目的のために着られる。しかし、分化はすでに非常にかなりの程度で存在しており、進んでいる」⁽⁷⁾。したがって「物的満足という目的と評判の良い体面という目的を混同してはならない」⁽⁸⁾。衣服の要素とドレスの要素は、まるで異なっているし、衣服とドレスはほとんど両立しえない。アパレルのこれら二つの要素のうちドレスは発展の序列の中で最優先されるし、今日まで首位を維持している。衣服の要素および満足を与える品質は、最初から非常に大きな程度でそうあり続けている。

ヴェブレンの見るところ、ドレスの起源は装飾の原理に求められ、その進化の出発点を与えている、という。しかし純粹に審美的な意味において装飾は近代のドレスにおいて相対的にわずかな重要性しか持たない要素である。「アパレルは補助的な付加物による単なる装飾の概念から、外側か

ら人を満足させるべき複雑な装飾の概念あるいは羨ましがられる存在へと進化した。同時にそれは美貌な人だけの所有物というよりも、その他の長所 (virtue) である所有を示すことに役立った。したがってドレスは、この方向に進化したもののの中に存在する」⁽⁹⁾。

またドレスに経済的事実を与えているものは、その着用者の富を表示する機能である。すなわち、より正確に言えば、その所有者の富を表示する機能である。というのも、着用者や所有者は必ずしも同一人であるとは限らないからである。女性のドレスは着用者と所有者が異なった人である、と考えられるが、彼らは同じ経済的単位の有機的構成員でなければならない。そして「ドレスは着用者が象徴する経済的単位の富の指標である」とヴェブレンは考えた。

特定の社会組織の下では社会的単位が男性であり、女性のドレスは男性の富の象徴であり、女性は男性の所有物である。近代社会では、一つの単位が世帯であるが、女性のドレスは属している世帯の富を示すものである。今日においてさえ女性のドレスについては、その着用者が家財の一つである、ということを示唆している。このドレスの最高の表現は、最も進んだ近代社会の女性の衣服において確かに見られる⁽¹⁰⁾。

ヴェブレンは、社会的階級と一般的な尊敬という栄誉の基礎は成功であり、より正確には効果的な能力である、と考えた。それは目に見える成功によって証拠立てられるような社会的単位の尊敬である。だから、「能力が所有物、金銭的な強さになる場合、われわれの時代の社会システムにおいて、社会的な重要性をもっている賞賛の基礎は社会的単位の目に見える金銭的な強さとなる。金銭的な強さの直接的で明白な指標は非生産的に支出し、消費する目に見える能力である」⁽¹¹⁾。差別化が始まった非常に初期に、並外れた程度において価値のある商品の衒示的な非生産的消費という手段によって社会的単位のもっている金銭的な強さを示すことが女性の機能となった。

名声はかなり明白に当該社会的単位の金銭的な強さと一致している。元

来彼女自身金銭的な所有物であったから、第一に女性は社会的集団の金銭的な強さの象徴である。社会的組織における機能の専門化の進歩とともに、この役割は一層もっぱら女性に委ねられがちになった。現代の最も高度に発達した社会では社会システムにおける女性の偉大な、特殊な、そしてほとんど唯一の機能は理念的に支払いに対する経済的単位的能力を証拠立てることとなった。つまり、女性の立場はわれわれの社会システムの理念的な体系に従えば、街示的に非生産的支出の手段となるようになってきた、といえる⁽¹²⁾。

相対的に長く継続した富の所有を示す手段は有閑階級以外身に着けたり保持しえない作法、たしなみおよび教養という形態を採る。それは特定の生活様式でも表現される。しかし、流行の方法はドレスの方法と同じである。それゆえに「ドレス」は経済的な観点から「浪費的な支出を見せびらかす」こととほぼ同義語となる⁽¹³⁾。

しかし、重要なことは、「これらの浪費的な商品の着用者や購入者は浪費を望んでいる、ということはない。彼らは支払う能力を明示することを望んでいる。探求すべきものは浪費という事実ではなくて、浪費の出現である」⁽¹⁴⁾。それゆえに、できるだけ良い取引で、それらを入手するためにこれらの商品の消費者によってなされる不断的努力が存在する。またこれらの商品の生産費を低くし、したがって価格を低くしようとするこれらの商品の生産者によってなされる不断的努力も存在する。しかし、これらの商品の消費がもはや注目に値する支払能力の明らかな証拠ではない価格にまですぐにその商品の価格が下落すると、当該の特定商品は支持を失う。そして消費は着用者の浪費的消費をする能力をより適切に明示する別のものに方向転換する。

求められる目的は浪費ではなくて浪費的見せびらかしである、というこの事実は生地 (material) の利用において擬似経済 (pseudo-economy) の原理に成長する。それゆえにアパレルが単に惜しげもない浪費を見せびらかすだけではない、という商品形態の標準として認識されるようになって

てくる。使われる材料は、見せびらかす方法に関する限り、「着用者（所有者）の能力の証拠を与えるように選ばなければならない」。さもなければ、その所有者に関しては無能力を連想させることになるからであるし、その見せびらかしという主要な目的を部分的に無効にさせるからである。

われわれが大きな資産の所有に対する望ましさという点を支持するのは、長く続く資産の所有をするため名門の生まれや貴族階級の生まれという伝統のためである。所有される資産の絶大さは見せびらかす量によって証明される。知識の証拠や作法の良い習慣形態は主として価値があるとされる。というのも、それはこれらの教養を身に着けるために多くの時間が費やされた、ということを示すからである。また教養は直接的ないかなる経済的価値も持っていないから、それは時間と労働の浪費に対する金銭的な能力を示している。「そのようなそれゆえに教養を高い程度で備えている場合には、いかなる役に立つ目的に対しても支出されない生活の証拠となる。尊敬という目的のために、それは非常に大量な商品の非生産的消費となりさえする」⁽¹⁵⁾。

それゆえに、ドレスの第一原理は衒示的贅沢（conspicuous expensiveness）さである。この原理の元での必然の結果として、新しい浪費的な衣服（garment）や細かい装身具の絶えざる廃棄によって与えられる支出の証拠が存在する。この原理は「どこでも時代遅れであるものは一切着ないということを必然的にする望ましさを植えつける」⁽¹⁶⁾。われわれの時代の大部分の先進国では、ドレスの最高の表現に関する限り——すなわち、舞踏会のドレスや類似した儀礼的な場合に着用するアパレルの場合、ドレスのルール基準が外部からの考慮によって妨げられない場合、という行動原理に表現される。したがって「いかなる外出用の衣類も二度と着ることはできない」ことになる。目新しさの要求はファッション全体の原理の基礎となっている。ファッションは連続的な不断の流れや変化は必要としない。流れや変化や目新しさは、あらゆるドレスの中心的な原理である衒示的浪費によって必要とされる。

「婦人は社会的機能の限定という美德によって、その経済単位の金銭的強さの象徴であり、それは結局また金銭的な損失という受動的形態を持ち堪えるその単位的能力を誇示することを彼女に委ねる」⁽¹⁷⁾。これを婦人は、彼女が働いていない生活を率先している、という事実（しばしば虚構）の証拠立てることで行なうことができる。「ドレスの究極の目的は、その着用者がどのような役に立ついかなることもできないことを証拠立てる、という事実をすべての観察者に対してはっきりと示すことであるし、その事実を観察者に無理やり認めさせることである。近代の教養のある婦人のドレスは、この習慣的な働いていないことを証明しようとしているし、かなり成功している」⁽¹⁸⁾。

そこでヴェブレンは次のようにいう。「スカートが残存しているのは、それが着にくいためである」⁽¹⁹⁾。それは大部分着用者の動きを妨げ、いかなる有用な仕事も不可能にする。だから、それが告知として役立つのは、スカートが暗示しているその着用者が効果的な働きを損なう無用さを与えられていることができる充分な手段によって裏付けられているからである。同様なことがハイヒールに当てはまるし、近代のドレスのいくつかのその他の特徴にも当てはまる。

さらにまた教養のある西洋の女性たちによって習慣的に行なわれている一つの大きな毀損（mutilation）の継続的根拠を捜し求めることができる。すなわち、中国人の纏足と類似した慣行と同様に不自然に締めつけられたウエスト。この近代の婦人の毀損は、恐らく厳密にはドレスの範疇の下には分類できないかもしれないが、その理論から排除するような一線を画すことはほとんど不可能である。また、それはその理論の概略は原理の要点においてその範疇と非常に緊密に符合する。

自発的に身体的な無能を受け入れる、という事実は、実際に確立された富の所有が便利さ、満足あるいは健康という方向での婦人のドレスに関する何らかの意図された無用さを示している。「着用者を束縛し、不便を感じさせ、傷つけるのがドレスの本質である」⁽²⁰⁾。というのも、そうするこ

とによりドレスは無駄や身体的無能さを耐え忍ぶ着用者の金銭的能力を告知するからである。

ところで、婦人は尊敬されるようになるためには働いていない、と見えなければならないというこの要求は、自分自身で生計の手段を立てることを強いられている婦人にとって不適切な状況である。それらは生計を立てる手段を与えるだけでなく、婦人たちがなんかの収入のある職業を持たないで生活しているという虚構を告知する手段も与えねばならないし、その動きを妨げ、産業的効率を減少させるように特に意図された衣類 (garment) でずっと妨げられ続けられなければならない。

そこでヴェブレンは、婦人のドレスの理論のきわめて重要な原則として、次の3つを挙げている⁽²¹⁾。

高価さ：衣服としてその効果に関して考慮すべきことは、アパレルは非経済的でなければならない。それは、いかなる役に立つことにも関与していないことに対して支払う着用者の経済的集団の能力という証拠を与えなければならない。つまり、満足や利益と高価なものを得ることなしに支払うこと。これには例外はない。

目新しさ：婦人のドレスは着られているものの明らかな証拠を与えねばならないが、相対的に短期間では同様に多くの商品に関して、容易に評価できる量の衣服を持ちこたえる無能さの証拠を与えねばならない。この規定の例外は、(金銭的) 上層階層によってのみ所有されるような、ずば抜けて高価なものである。世襲財産の所有は賞賛されるべきである。というのも、それが数世代にわたる浪費の慣行を証拠立てるからである。

愚かしさ：着用者がいかなる収入のある職業に対して無能力である、という明らかな証拠を与えねばならない。そして、それはまた、たとえアパレルの拘束が取り除かれた後でさえ彼女がいかなる有用な努力に対しても、永久に不向きである、ということを明らかにすべきである。この規則からの例外は存在しない。

これら3つの原理以外に、美的な意味で装飾の原理がドレスにおいてある部分を演じている。その原理はある程度経済的重要性はもっているし、かなりの普遍性をもって適用される。しかし、決して不可避免的に存在するわけではない。それが存在する場合には、上に述べた3つの原則によって範囲を定められている。実際、ドレスにおける装飾の原理の役目は目新しさの原理に対する手作りの原理である。「すべてのものは上で明確に述べた3つの基本的な原理の支配的な影響力を蒙っている。これら3つのものは本質的であり、婦人のドレスの重要な規範を構成している。そして、富という点で人々の間の対抗意識の機会が残存している限り、いかなる切迫して事情も、これらの原理を無効にすることはできない。富における差異の可能性が与えられるならば、このドレスの規範の支配力は不可避である⁽²²⁾」。そして「衒示的浪費」という重要な規範は、これがその経済的な根拠を残している限りにおいては無効にできない。

また、第二の非常に類似した人々の階級が存在する。彼らのアパレルも婦人のドレスの規範に順応する。この階級は教養のある社会の子供から構成されている。子供たちは、この理論の目的のために商品の衒示的消費者としての教養ある女性の偉大な機能を完全にするのに役立つ補助的材料と看做すことができる。「教養のある婦人の手元にいる子供は衒示的消費の付帯的な器官である。労働者の手元になるいかなる道具も生産効率の付帯的な器官であるように」⁽²³⁾。

以上が「女性のドレスの経済理論」の骨子である。次に節を改め『有閑階級の理論』の「第7章金銭的文化の表示としての衣服」でのヴェブレンの所説を検討することにしよう。

2. 「金銭的文化の表示としての衣服」

ヴェブレンは、上で見た「女性のドレスの経済理論」で展開した「衣服」についての議論をより詳細に独自の消費論との関係で展開している。

まずヴェブレンは、この「金銭的文化の表示としての衣服」の劈頭において次のように述べている。

「いままで述べてきた経済原理が生活過程のある方向の日常の事実に、いかに当てはまるかを実例によって多少詳しく示すことが適当であろう。この目的にとって、衣服に対する支出ほど適当な例証を与える消費の方面はない。衣服の中に表示されるのは、特に財貨の衒示的浪費の法則である」⁽²³⁾。

つまり衣服は、われわれの金銭的な地位をあらゆる観察者に対してひと目で示すものである。ヴェブレンによれば、衣服は他のいかなるものの消費よりも見せびらかしのための公認の支出の基準がより明白に存在しており、恐らく、より一般的に行なわれている、と考えられる。「あらゆる階級が服装のためにこうむる金銭支出の大部分は、身体のプロテクトのためよりも、むしろ尊敬されるような外観のためにおこなうものである」⁽²⁴⁾。

あらゆる近代社会で衣服に使われる財貨の商業的な価値は、その財貨が衣服を着る人の身体を包むために提供する機械的效果よりも、ずっと大きな程度で、流行の性質、すなわちその財貨の名声を博する性質から成り立っている。衣服の必要は明らかに「高級な」もしくは精神的な必要である。衒示的浪費の法則は、趣味や体面の基準を作り出すことによって衣服の指導原理となる。普通の場合には、際立って浪費的な衣服を着たり、買ったりする人の意識的な動機は、確立された習慣に従うという必要、趣味や世評の公認の標準に適合する必要などである。「衣服の点では高価であるということの要求が、われわれの思考習慣の中に非常に深く染み込んでいるために、金のかかった衣服以外のものは、すべてわれわれにとって本能的に嫌忌すべきものとなる。われわれは、ろくに考えもせずに、安価ものは無価値なものと思い込んでしまう。安価なアパレルは『安かろう、悪かろう』という格律のもとで劣等なものと考えられる」⁽²⁵⁾。

趣味と実用性の双方を基礎として、安価な装飾品は「安かろう、悪かろう」という格律のもとで、劣等なものとする。「われわれはそのものが

高価であることにほぼ比例して、実用的でもあり、美しくもあると考える。われわれはすべて金がかかった手作りの装飾品の方が、ずっと安価な模造品よりも美の点でも実用性の点でも、はるかに好ましいと思う」⁽²⁶⁾。支払能力の証拠としての衣服の機能は単にその着用者が肉体的快樂のために必要以上に高価な財貨を消費することを示すことだけに終わるものではない。衣服は、このような単なる浪費的な消費の素朴で直接的な証拠以上にさらに微妙で、さらに広汎な可能性を、もっている。もしも、その着用者が思うままに、また不経済に消費する余裕があるということを示すほかに、彼もしくは彼女が生活費を稼ぎ出す必要がない、ということがやはり同じような仕方で示されるならば、社会的価値の証拠は非常に大きく増進される。

われわれの衣服は「その目的に効果的に役立つためには単に高価でなくてはならないばかりでなく、その着用者がいかなる種類の生産的労働にも従事していない、ということをあらゆる観察者に対して明らかにする必要がある」⁽²⁷⁾。一般の人の頭の中で優雅な衣服として通用するものを良く調べてみると、それはあらゆる点で、その着用者がなんら有用な労力を費やす習慣がないという印象を与えるように工夫されていることが明らかとなるであろう。きちんとしていて汚れない衣服の快適な効果は、すべてではないにしても、主としてそれが閑暇——あらゆる種類の生産過程との個人的接触からの免除——の連想を伴っていることに基づいている。優雅な衣服は、それが高価であるという点で優雅な目的に役立つばかりでなく、また、それが閑暇の刻印であるがためにも、それに役立つのである。それは、その着用者が比較的多額のものを消費いうことを示すばかりでなく、それと同時に彼が生産をせずに消費することをも証明する。

ここでヴェブレンは女性の衣服について次のように述べている。

「女性の衣服はその着用者が生産的職業から離れていることをはっきり示す点で男性に衣服よりもずっと勝っている。例えば、女性の優美の型のボンネットは男性のシルク・ハットよりも労働を不可能にす

るという点一步も二歩も進んでいる。また婦人用の靴はフレンチ・ヒールがついており、それは磨くためにはどうしても閑暇を要するということの証拠である。このハイ・ヒールは明らかに最も単純で最も必要なものでも、あらゆる肉体労働を極度に困難にするからである。同様なことがスカートその他、女性の衣服に特有な装飾品についても、一層高い程度で当てはまる。スカートに固執する本質的な理由は、それは金がかかっており、その着用者があらゆる場合に邪魔になり、あらゆる有用な労働を不可能にするからである。また同様なことが、髪の毛を必要以上に長くしておく女性の習慣についても当てはまる」⁽²⁸⁾。

しかし女性の服装は、それが労働の免除を証明する程度によって、現代の男性の服装を凌駕しているばかりでない。それはまた男性によって習慣的に行なわれているあらゆるものと質的に異なっている特殊の極めて特徴的な様相をもっている。このような特徴はコルセットがその典型的な例となっているような部類の工夫である。コルセットは経済学ではもともと、その主体の生活力を低下させ、彼女を永久に、また誰が見ても、労働に適しないようにする目的で行なわれている一つの毀損 (mutilation) である。コルセットは、その着用者の個人的魅力を損なうかもしれないが、しかし、その点で被った損失は彼女が明らかにますます金がかかっていて、弱そうにみえることから生ずる名声の点での利得によって相殺される。女性の服装の女らしさは、実質的な事実の点では、結局、女性特有な衣服によって与えられる有用な労働に対する一層効果的な障害に帰着する⁽²⁹⁾。

だから、これまでの考察で衣服の大きな、支配的な規範として、衍示的消費の一般的原理を得ることができた。そして、この原理を補足し、その系論となる第二の規範として、衍示的閑暇の原理を得る。

衣服の仕立て、この規範は、その着用者が生産的労働には従事せず、また手っ取り早くいえば、従事することができないことを示すような、いろいろな工夫の形をとってあらわれる。これら二つの原理の他に第三のそれ

に劣らない拘束力をもつ原理がある。「衣服は際立って金がかかっており、また不便なものでなくてはならないばかりではない。それはまた同時に、最新流行のものでなければならない」⁽³⁰⁾。ヴェブレンによれば流行の変化という現象については、今までいかなる十分な説明も少しも与えられていない。このような最新流行の原理は衒示的浪費の法則に属するもう一つの系論である。

もしもそれぞれの衣服が、ごく短期間しか役に立たないならば、また、もしもこの前の季節の衣服はどれ一つ現在の季節に持ち越され使われることがないならば、衣服に対する浪費的な支出は甚だしく多くなるであろう。われわれがいえることは「衒示的浪費の規範は、衣服に関する全ての点で制約的な監視を及ぼすものであり、したがって流行の変化はすべて浪費の要求に合致しなければならない、ということである」⁽³¹⁾。

しかし、これだけでは現在行なわれているスタイルの変化を作り出し、それを受け入れる動機に関する問題にはなんら答えることにはならない。そこで流行の発明やイノベーションの動機として役立ちうるような創造的原理を求めるためには、われわれは衣服がそれによって始まった原始的、非経済的な動機——装飾の動機——にまで遡らねばならない。流行のそれぞれの継続的なイノベーションは形や色彩もしくは効果に関するわれわれの感覚が排除するものよりもそのような感覚にとって、一層受け入れやすいような誇示の形式に達しようとする努力である。「スタイルの変化は、われわれの美の感覚に訴えるものを得ようとする絶えざる探求の表現である。しかし、あらゆるイノベーションは衒示的浪費の規範の淘汰的作用を受けるから、それが起こりうる範囲は幾分限定される。イノベーションは、それが排除するものよりも一層美しく、また、しばしば一層気に入らないようなものでなくてはならないばかりでなく、またそれは高価であるという公認の標準にも合致しなければならない」⁽³²⁾。

衣服の美に達しようとするそのような絶えざる努力の結果は、ちょっと診ると芸術的完成に段々と接近することであるように思われるであろう。

われわれは流行が人間の形態に際立って似つかわしいひとつ、もしくはもっと多くの種類の衣服の方向に向かって進むはっきりした趨勢を示すことを期待するのが当然であるかもしれない。また、われわれは、これらの多くの年月にわたって、あらゆる熟達や努力が衣服に対して払われたのであるから、今日では流行は永久に通用する芸術的理想に極めて接近した相対的完成なり相対的安定なりを達成したに違いないということを希望して差し支えない実質的な理由があると思うかもしれない。しかし、実際にはそういうことはない。「実際今日のスタイルはそれ自体としては、十年前のものより、また二十年前、五十年前もしくは百年前のものより、ずっと恰好が良いと主張することは、きわめて危険であろう。これに反して、二千年以前に流行したスタイルが今日最も手が込んでいて骨を折って作った構築物よりも、ずっと恰好がよいという主張が少しも矛盾なく通用する」⁽³³⁾。

それゆえに、今述べたような流行についての説明は十分な説明ではない。ある種の割合に安定したスタイルや型の服装が世界の各地に作り出されているということは周知の通りである。このようなわりあいに安定して服装は多くの場合、かなり厳格に、また狭く地域が限られており、またそれは場所が異なるにしたがって、わずかつつ整然とした階梯をもって変化する。

つまり「時代や考え方の試練に耐えうるような安定した服装は、衒示的浪費の規範が現代の大きな文明都市ほどには、至上命令として自己を主張しないような状況のもとに作り出される。今日、そのような大都市では、割合に可動的で富裕なその住民が流行に関して歩調を決めている」⁽³⁴⁾。このようにして安定的芸術的な服装を作り出した国や階級は、そのような状況に置かれていたために、それらのものの間の金銭的見栄は財貨の衒示的消費よりも、むしろ衒示的閑暇の競争の方向を採った。したがって、流行はわれわれの間のように、財貨の衒示的消費の原理が最も絶対的に自己を主張するような社会の場合に、もっとも不安定であり、最も不恰好である、ということ一般にいえるであろう。

これらのことはすべて、高価であることと芸術的衣服との間の対立関係

を指し示す。実際的な点では衛示的浪費の規範は、衣服は美しく、また良い恰好でなくてはならない、という要求と両立しない。そして、このような対立関係が流行の絶えざる変化を説明するものであって、それは高価であるという基準も美の基準も、それだけでは説明することができない。「名声の標準は衣服が浪費的な金銭支出を示すことを要求する」⁽³⁵⁾。

衣服の流行の細部の外見的な効用は常に非常に見え透いた見せかけであり、またその本質に無駄な性質は、やがて耐えられないほど露骨にわれわれに注意を引く。そうなるとわれわれは新しいスタイルに逃れる。しかし、新しいスタイルは世評となるほどの浪費や無益の要求に従わねばならない。その無益さはまもなく、その先行のスタイルの無益さと同じように、鼻持ちならないものになる。したがって、浪費の法則がわれわれに与える唯一の逃げ道は同じ様に無益で永続しない何らかの新しい恰好に救いを求めることである。ここから流行の衣服の本質的な醜悪さや絶えざる変化が生まれる。

このように流行の移り変わりの現象を説明したので、次の問題は、その説明を日常の事実と一致させることである。これらの日常の事実の中には、ある時代に流行スタイルに対してあらゆる人々が抱く周知のような愛着、ということがある。ある新しいスタイルが流行してきて、あるシーズンは好評を保つ。そして、それが少なくとも最新流行である間は、人々はきわめて一般的にそのスタイルを魅力がある、と思う。現在の流行は美しいと思われる。これは、一つにはそれが以前のものとは違うために、ほっとした感じを与えるためであり、またひとつには、それが世評にあがるからである。

「世評の基準がある程度までわれわれの趣味を作り出すのであり、したがってその指導原理の下では、その斬新さがきえてしまうまでは、あるいはその世評の保障が同じ様な一般的目的に役立つ新奇な作品に移るまでは、すべてのものが好ましいものとして受け入れられるであろう」⁽³⁶⁾。ある時期に流行したスタイルの、言うところの美しさや「素晴らしさ」が単に束

の間のものであり、見せかけのものであることは移り変わってゆく多くの流行が、どれひとつとして時の試練に耐えることができない、という事実によって明らかである。長期的な時間の流れの中でみると、流行品の一番良いものでも不恰好ではないにしても、なんとなくグロテスクに見えてくる。

いかなる場合でも、必要な時間の長さは、そのスタイルの本来の嫌忌感の程度に反比例する。流行品の嫌忌感と不安定性の間に存在するこのような時間的關係は、スタイルが次々に他のものの後続き、それに取って代わることが激しければ激しいほど、健全な趣味にとってますます気に入らなくなる、という推論に根拠を与える。「その社会、ことにその社会の富裕な階級が富、可動性の点および人間的接触の範囲の点で、ますます発展すればするほど、衍示的浪費の法則が衣服に関してますます強くあらわれてくるであろうし、美的感覚はますます休止状態となり、また金銭的名誉の基準によって圧倒されるようになり、流行はますます急激に移り変わるであろうし、そして次々に流行するいろいろなスタイルはますますグロテスクで我慢できないものとなるであろう」⁽³⁷⁾。

このような衣服の理論は現代では殆んどあらゆる点で「女性の衣服に対して一層大きな力で当てはまる。女性の衣服は男性の衣服とは本質的に異なっている。女性の衣服では、その着用者があらゆる卑俗な生産的職業から免除されているかその能力がないことを証明するような特徴を明らかに一層強く主張する」⁽³⁸⁾。そして、その家族の首長を代行して消費することが経済発展の過程の中で女性の任務となった。そして女性のアパレルは、このような目的を持って工夫されている。明らかに生産的な労働は身分の高い女性にとっては著しく名誉を傷つけるものとなった。それゆえに、女性のドレスの仕立てについては、その着用者が有用な労働に従事する習慣がなく、また従事することができないという事実（しばしば、実際にはひとつのフィクション）を見るものに印象づけるように特別な骨折りをしなければならない。「行儀作法は身分の高い女性が同じ社会階級の男性よりも一層徹底的に有用な労働から遠ざかることや一層多くの閑暇の見せかけ

を行なうことを要求する。行儀作法は女性の衣服その他の装身具の金のかかった誇示に一層絶えざる注意を払うことを要求する。われわれの社会体制は父系制の過去からの伝承によって自分の家庭の支払能力を証明してみせることを特に女性の職務としている」⁽³⁹⁾。

だからその家庭の女性の金遣いが荒く非生産的であればあるほど、その生活、その家庭もしくはその戸主の名声の目的にとって、ますます名誉あるものとなり、ますます効果的となるであろう。女性が有閑生活の証拠を与えるばかりでなく、有益な活動を行なう能力を持たないように要求される場合にますますそうである。

「衒示的浪費や衒示的閑暇が名声を博するのは、それらのものが金銭的実力の証拠となるからである。金銭的実力が名声を高めるものとなり、また名誉あるものとなるのは、それが結局、成功なり、優れた力なりを証明するからである」⁽⁴⁰⁾。

このような一般論を女性の衣服に適用し、それを具体的な言葉で言い換えれば、ハイヒール、スカート、実用的でないボンネット、コルセットなどあらゆる文明国の女性のアパレルの際立った特徴となっているような、およそ着用者の快楽を無視するようなものは、現代文明の生活様式では女性はおもに理論上、男性に経済的に依存するものである、ということ——恐らく、非常に理想化された意味では、女性は男性の動産であるということ——を証明する多くのアイテムである。女性の側での、これらすべての衒示的閑暇や衣服の、ごくありふれた理由は、女性が召使であって、経済的機能分化の過程で、その主人の支払能力を証明して見せる職務が彼女に委託された、という事実の中にある。

これらの点で女性のアパレルと家庭の召使のアパレル、特にお仕着せを着た召使の間に、際立った類似性がある。双方とも不必要な贅沢の非常に手の込んだ誇示が存在するし、双方の場合において、着用者の肉体的快楽

について際立った無視も存在する。しかし、貴婦人の衣装は、その着用者の肉体的な弱さを強調しないまでも、その怠惰を手の込んだやり方で強調している点で、召使の衣服よりもずっと進んでいる。そして、これは当然のことである。というのも理論上、金銭的文化の理想的な様式によれば、家庭の主婦は、その家庭の召使頭であるからである⁽⁴¹⁾。

その衣服の点で召使階級に類似しており、また、その衣服が女性の衣服の女らしさを作り出すのに役立つ多くの特徴を示す別の階級が少なくとも一つある。それは僧侶階級である。僧侶の法衣は隷従的身分や代行的生活の証拠として示されたあらゆる特徴を強められた形で示している。法衣と呼ぶのが相応しい僧侶の衣服は、衣服という点では僧侶の日常の習慣よりもずっと際立って、ゴテゴテと飾り立てた、おかしい恰好の、不便な、そして少なくともちょっと見ると不愉快なものである。態度やアパレルの点でのこのような類似は経済的職能に関する二つの階級の類似に基づくものである。しかし、それを着ることが、その着用者の生理的快楽には殆んど、もしくは全く貢献しないことを示すように工夫されている。

一方での女性、僧侶および召使に衣服と、他方での男性の衣服との間の境界線は、実際には常に必ずしもみられないけれども、しかし、それが一般の思考習慣の中に多少ともはっきりとした形で常に存在している、ということは議論の余地がないであろう。「衣服のある種の要素や特徴の流行は、金銭的地位の一つの証拠としてそのものの効用に依存する、という準則の一つの証明であることがわかる。コルセットはある種のかなりはっきりと限定された社会階層の中でだけつかわれている」⁽⁴²⁾、ということはだれでも知っていることである。

「上層有閑階級が世間的体面のあらゆる事柄の歩調を決めるとともに、社会の残りの部分への効果も衣服の様式の漸次的改良という結果となる。社会が富と文化の点で進歩するとともに、支払能力は見る人のますます細かい鑑識眼を必要とするような方法によって証明される。

広告方法の間のこのような細かい識別は、実際一層高い金銭的文化の一つの特徴である」⁽⁴³⁾。

3. ヴェブレンの消費論および今後の課題

以上がヴェブレンの衣服論の骨子であるが、その基礎となっている衒示的閑暇および衒示的消費についてまず見てゆくことにしよう。

ヴェブレンは社会の上層階級は慣習上生産的職業から免除、もしくは除外され、ある程度名誉を伴う職業のために留保される、と考えられた。そして生産的な職業からの免除は、彼らの卓越した地位の経済的な表示あると考えられた。社会の醸造階級である有閑階級の制度は職業間の差別から出現した、と考えられた。そして、そのような区別が現代の生活の中にも先入観として根強く残存している、と看做した。

ヴェブレンは金銭的文化社会において有閑階級は、人々の尊敬を獲得し、それを保持するためには単に富を所有するだけでは不十分である、と考えられた。富は証拠立てられなければならない、尊敬は証拠がある場合にのみ払われるからである。つまり労働からの衒示的な疎外がすぐれた金銭的成功の因襲的な刻印となり、名声の因襲的な指標となる。そして生産的労働に従事することは貧困と服従の刻印であるから、社会の名声のある地位とは両立し得ない。

文化的進化の系列のなかで有閑階級の出現が所有権の始期と時を同じくしていると考えた。そして、所有権の根底に横たわる動機が見栄であり、この動機が社会構造のあらゆる様相のあらゆる発展の中に作用し続けると捉えた。時代の経過と共に富の所有は名声と尊敬の慣習的な基礎として相対的な重層性と効果を増してくる。他の人との金銭的な上下の比較によって判断される相対的成功が行動の因襲的な目的となる。この場合の上下の比較とは価値の点で人々を評価する過程を意味する。

名声の基礎として財産を誇示すること閑暇を強く誇示することを導く。

つまり、非生産的な時間の消費を見せびらかすことである。ここでヴェブレンがいう閑暇とは「怠惰や無為を意味するものではない。それが意味するのは時間の非生産的消費である。時間が(1)生産的な仕事は価値がないという考え方から、また(2)怠惰な生活を送りうる金銭的能力の一つの証拠として、非生産的に消費される」⁽⁴⁴⁾ ことである。

例えば、ヴェブレンが挙げている事例の一つが礼儀作法である。それは固有の効用を持ってはいるが、その究極的な経済的な根拠は時間や労力の非生産的な使用という名誉ある性格の中に求められるべきと考える。つまり作法の価値は、それが有閑生活の証拠物件であるということのなかにある。閑暇は金銭的名誉をうるための因襲的な手段であるから、だれでも多少とも金銭的に見苦しくない生活を楽しむものにとって行儀作法に通じることが必須のこととなる。

有閑階級に属する貴婦人も閑暇および消費において、主人代わる「代行的閑暇」や「代行的消費」行なう。食物、衣料、住居、家具の消費やその他の家庭備品においてである。つまり体面のために上等な品物を消費することが、その家庭の金銭上の体面をあらわす。衒示的閑暇や衒示的消費の効用は両者に共通する無駄使いの要素の中にある。前者は時間や骨折りの無駄遣いであり、後者は財貨の無駄遣いである。両方とも富の所有を誇示する方法であり、これら二つのものは同等なものとして受け取られる。しかし、社会分化が一層進み、一層広い人間環境に手を届かすことが必要となる場合には、消費の方が体面を保つ通常的手段として閑暇の上を行くようになる⁽⁴⁵⁾。

消費を規制する規範は、概して衒示的浪費の要求であるけれども、消費者があらゆる特定の場合に、それに基づいて行動する動機は、単純率直な形のこの原理であると考えてはならない。普通の場合、消費者の動機は確立された慣行に従い都合の悪い注意や噂話を避け、消費する財貨の種類、分量および等級、彼の時間や労力の作法に適った使い方などの点での世間並みの体面の基準に従って生活しようとする願望である⁽⁴⁶⁾。

つまり、金銭上の世間的な体面の標準が要求するような時間や物質の代行的な消費を行なうことが有閑階級の婦人の役割となる。その事例のひとつがここで見てきた「衣服 (dress)」に関するヴェブレンの所説である。

女性が生産的労働に適さない衣服を身につけたりするのは、有用な労務をおこなうことができず、したがって、その持ち主によって怠惰な状態で扶養されねばならない、ということを示すからである。そのような女性は役に立たず、しかも金がかかるものであり、だからこそ、その女性は金銭的な実力の証拠として価値がある。

しかしヴェブレンはこうも述べている。「ある商品は有用でもあり、また無駄でもあるかも知れない。そして、そのものの消費者に対する効用は、非常に様々な割合で、有用さと無駄から成り立っているかもしれない。ある種の品物もしくは役務の主要な目的や要素が、いかに明白に衛示的浪費であるにしても、それらのものの用途には、有用な目的な少しもない、と主張することは危険であろう。また主として有用な生産物について、その価値の中には、無駄の要素が直接にあるいは間接に全く無関係であると主張することは、幾分危険の程度が少ないだけであろう」⁽⁴⁷⁾。この点の認識は非常に重要である。

《注》

- (1) ヴェブレンについては、たとえば小原敬士著『ヴェブレンの社会経済思想』一橋大学経済研究叢書 18, 岩波書店, 昭和 41 年 3 月刊, 松尾博著『ヴェブレンの人と思想』ミネルヴァ書房, 昭和 41 年 6 月刊, 中山大著『ヴェブレンの思想体系』ミネルヴァ書房, 1974 年 5 月刊, および松本正徳著『ヴェブレン研究——アメリカ経営思想史研究序説——』未来社, 1971 年 2 月刊などを参照されたい。宇沢弘文は「ソースティン・ヴェブレンは、経済学の歴史のなかで、もっとも卓越した業績を残した経済学者の一人である。ヴェブレンはすぐれた分析, 透徹した直感, 深い洞察をもって、経済学の考え方に新しい機軸を生み出し、現在に至るまで、その思想的独創性において彼を超える経済学者は出ていない」と述べている。(宇沢弘文著「ソースティン・ヴェブレン」『宇沢弘文著作集第 IV 巻』, 岩波書店, 1994 年 12 月 12 日刊,

- 247 ページ)。またヴェブレンの進化論的経済学については、たとえば、次のホジソンの所説も参照されたい。Geoffrey M. Hodgson, “On the evolution of Thorstein Veblen’s evolutionary economics,” *Cambridge Journal of Economics* 1998, 22, pp. 415–431.
- (2) Max Lerner, *Portable Veblen* (New York: Penguin Books, 1976) p. 29.
 - (3) 田中敏弘はグルーチャー (Allan G. Gruchy) 所説を引用しつつ次のように述べている。「制度学派は、ヴェブレンの第1段階、ミッチェル、コモンズ、J.M. クラークらの第2段階を経て、第3段階にあたる第二次世界大戦後の新制度主義へと展開したとみることができるであろう」(田中敏弘著『アメリカ経済学史研究——新古典派と制度学者を中心に——』晃洋書房、1993年11月刊、70ページ)。また磯谷明德「制度と進化の経済学」および藤田菜々子「反主流の経済学」も参照されたい。いずれも根井雅弘編著『わかる現代経済学』朝日新書 087, 朝日新聞社、2007年12月刊に所収されている。
 - (4) Laurie Simon Bagwell and B. Douglas Bernheim “Veblen Effect in a Theory of Conspicuous Consumption” *The American Economic Review*, p. 349.
 - (5) Thorstein Veblen, “The Economic Theory of Woman’s Dress”, *Popular Science Monthly*, Vol. XLVI, November, 1894. ただし引用は *Essays in Our Changing Order*, ed. by Leon Ardzrooni with The Addition of A Recently Discovered Memorandum “Wire Barrage” supplied by Joseph Dorfman (New York: Augustus M. Kelly, Bookseller, 1964).
 - (6) Thorstein Veblen, *The Theory of The Leisure Class: An Economic Study of Institution* (New York: The Macmillan Company, 1899)。ただし引用はケリー版を使用。(New York: Augustus M. Kelley, Bookseller, 1975)
 - (7) Thorstein Veblen, “The Economic Theory of Woman’s Dress.” p. 65.
 - (8) *Ibid.*, p. 65.
 - (9) *Ibid.*, p. 66.
 - (10) *Ibid.*, p. 67.
 - (11) *Ibid.*, p. 68.
 - (12) *Ibid.*, pp. 68–69.
 - (13) *Ibid.*, p. 69.
 - (14) *Ibid.*, p. 70.
 - (15) *Ibid.*, p. 71.
 - (16) *Ibid.*, p. 72.
 - (17) *Ibid.*, p. 73.

- (18) *Ibid.*, p. 73.
- (19) *Ibid.*, p. 73.
- (20) *Ibid.*, p. 74.
- (21) *Ibid.*, pp. 74-75.
- (22) *Ibid.*, p. 75.
- (23) *Ibid.*, p. 77.
- (23) Thorstein Veblen, *The Theory of The Leisure Class*, p. 167. 小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波書店, 昭和 36 年 5 月 25 日, 161 頁。なお, 本稿では邦訳書がある場合, 該当ページを記しているが, 必ずしも邦訳書どおりではない。これはすべての場合に当てはまる。
- (24) *Ibid.*, p. 167, 同上訳書 162 頁。
- (25) *Ibid.*, p. 168-169, 同上訳書 162~163 頁。
- (26) *Ibid.*, p. 169, 同上訳書 163 頁。
- (27) *Ibid.*, p. 170, 同上訳書 164 頁。
- (28) *Ibid.*, p. 171, 同上訳書 165 頁。
- (29) *Ibid.*, p. 172, 同上訳書 165~166 頁。
- (30) *Ibid.*, pp. 172-173, 同上訳書 166 頁。
- (31) *Ibid.*, p. 173, 同上訳書 167 頁。
- (32) *Ibid.*, p. 174, 同上訳書 167~168 頁。
- (33) *Ibid.*, pp. 174-175, 同上訳書 168 頁。
- (34) *Ibid.*, pp. 175-176, 同上訳書 169 頁。
- (35) *Ibid.*, p. 176, 同上訳書 170 頁。
- (36) *Ibid.*, p. 177-178, 同上訳書 171 頁。
- (37) *Ibid.*, p. 178, 同上訳書 172 頁。
- (38) *Ibid.*, p. 179, 同上訳書 172 頁。
- (39) *Ibid.*, p. 179, 同上訳書 173 頁。
- (40) *Ibid.*, p. 181, 同上訳書 174 頁。
- (41) *Ibid.*, p. 182, 同上訳書 175 頁。
- (42) *Ibid.*, p. 184, 同上訳書 177 頁。
- (43) *Ibid.*, p. 187, 同上訳書 180 頁。
- (44) *Ibid.*, p. 43, 同上訳書 47 頁。
- (45) *Ibid.*, pp. 85-86, 同上訳書 86 頁。
- (46) *Ibid.*, pp. 115, 同上訳書 113 頁。
- (47) *Ibid.*, pp. 100-101, 同上訳書 99~100 頁。